

土佐から出た土木界の巨人

廣井博士と野中兼山に就いて……(1)

兼山を弾劾した深尾家の配下から廣井博士の出られたのは土藩の名譽恢復である

○

廣井博士を語る前に、是非知つて置き度いと思ふのは、博士を生んだ土佐の國その時代に就いてある。廣井家が儒者として仕えてゐた佐川の深尾家、及びその主君たる高知藩主山内容堂侯、其他維新回天の大業に身を投じて東奔西走した土佐の勤王黨、是等を一通り知つて置く事は、人格的に拔群な廣井博士を知る上に一段の興趣を添えるものだからである。そして是等の史實は頗る豊富であるが、此處では主として、南國土佐の産んだ、我國土木界の先驅者としての野中兼山と、廣井博士とを對照して話して見たい。

野中兼山の事に關しては、兼山が江戸から土佐へ土産として持ち歸つた蛤を、海の中に撒き散らして出迎えの國人を驚かしたと云ふ、小學校の教科書でおなじみの逸話の外、一般に傳はる處甚だ少ない。是は例えば、豊臣秀吉あるを知つて、大阪城を築造した工師の苦心を知らないも一般で、由來技術者と云ふものは縁の下の力持ちをさせられて來たのである。

○

廣井博士の生れた文久二年と言ふ年は舊日本が新日本へ更生する多事多難の時代であつた。土佐の山内藩に於ては勤王倒幕黨の首領たる武市瑞山が同志三人を放つて、反對黨の吉田東洋を暗殺し、藩論を統一しようとした、吉田東洋は藩主山内容堂の學問の師で主従ともに勤王論者ではあつたが、武市一黨の如く急激な倒幕論者ではなかつた。然るに此の暗殺事件があつて、直に藩政大改革が行は

れ勤王倒幕論が益々擡頭した。廣井博士の父たる熊之助氏は博士三歳の元治元年納戸役として小録を喰んでゐた爲め、青年論客の間には入つてゐないが、土佐藩の主張が天下の形勢に大關係のあつた時であるから思想上に相當の影響をうけてゐた事は當然である。

納戸役としては斯る政論に加はる事は出来ないが、思想的に青年黨の勤王倒幕に共鳴した故か、兎に角不行届の點があつたこと云ふので元治元年三月及び慶應二年五月に勤事差控へ三日間仰付かつた。當時世論は益々熾々として定りなく天下の形勢は實に混沌たるものであつた。

○

土佐が、その最初の總理大臣として今日漸く濱口雄幸氏を出したのは薩摩や長州に比べるに寧ろ遅すぎると云つて好い。維新以來土佐からは、幾多の大政治家、大實業家を輩出してゐるが、それは何れも土佐勤王黨の先輩が回天の大業に盡瘁して基礎づけして置いた御蔭である。然しそれよりもつと時代を溯つて今より約二百年前に野中兼山と云ふ大政治家がゐた事は餘りに聲が少い。

○

野中兼山は土佐から出た土木技術界の大先輩である。明治前後に生れた土佐人で、廣井博士の外に身を土木界に立てた人に白石直治博士、仙石貢博士等があり、皆一流の技術家であるが、そして此等の人々が何の程度まで兼山の感化をうけてゐるか云ふ事は明でないが、自分の郷土から土木の大先輩たる野中兼山が出てゐる事は土佐人が時代的に覺醒す

べき明治維新の少年立志に精神的大關係があつた事は想像するに難くない。

兼山は土木技術家として經世的大手腕を振つて土佐藩の産業、風俗、教育、武備等に一大改革を實行した、兼山の實行力は伊太利の首相ムツリニー氏の如く、又米國の大統領フーバー氏の如くでもある。然しながら兼山の施政は二十七年間にして全然顛覆された、反兼山の思想が一時にドツト生じた、而して兼山は悲慘な末路を告げた、それは土佐に於ける悲しむべき政變であつた。

○

兼山を弾劾したのは兼山の同僚たる一萬石の國老深尾一家である、廣井家の主人たる深尾一家が大經世的土木家たる兼山の事業にケチをつけて遂に藩公山内氏を動かして兼山に閉門を仰付け其末路を實に悲慘なものとし、血族までも斷絶せしめた事は、山内藩を初め深尾家末代の遺憾事である、然し後年此の深尾家の管下から廣井博士が出た事は何よりの名譽恢復である。

廣井博士は大日本の土木工學者であり、大技術家であつた、性格に多少の異ひはあるが兼山と廣井博士には郷土的に共通の點が多分にある様に考へられる。兼山が事を爲すに必ず身を以て之に當るの有様は廣井博士が一事をなすに必ず身命を捧げるの概があつた事と如何にも能く似てをる。兼山の印象は豪快な政治家らしく見え、廣井博士は温厚なる學者らしく見えるが、兩者の身中にみなぎる血汐は同じく事に當つて高鳴り國家民人の幸福に對する使命を果すの任と云ふものは全く一致した抱負であつた。之れが爲めには何物の困難にも打ち勝つと云ふ氣力は廣井博士の一生を通じた信念であつた。表面は兼山の男性的なのに對し廣井博士は如何にも物柔かに見えるが意志の剛健なる點は或は兼山に一步を越してゐるかも知れない。

○

二人の少年時代を比較して見るに、兼山の

父は二萬九千石の大老であるが、生れた時の境遇は一浪人の兒で、生活も元より豊かではなかつたが、少年時代は非常に親に孝を盡してをる。兼山の父が病氣になつてからは三年間と云ふもの其傍を離れずに醫藥の世話をして一方又母に仕ふる事も親切で他の見る眼にも美しい程であつた。

廣井博士の少年時代の家庭は之も殆んど浪人的生活であつた、祖父は深尾家の儒者で相當な録を喰んでゐたが、父は廢藩に依り深尾家と俱に高知へ出て漸く生活を立てゝゐた位のもであつたが、九歳の時父と死別されて、其以後は一人の母と祖母に仕へて實に温良なる少年であつた。

○

兼山も廣井博士も少年時代の學問の仕方は何れも自學自習で殆ど獨學でやつたらしい兼山は初め禪を學んだが後に儒道に入り、熱心な儒學者で國利民福を圖る事を實行するに至つた。廣井博士も少年時代は祖父の業たる儒學に入つた事勿論であるが後に熱心なクリスチャンとなつて、之も國利民福の基礎を築く學問に進んだ事は實に奇と云はねばならぬ。

○

二人の性格が又能く似てをる、自己の信ずる處を實行するには鬼神も恐れざるの態度で且つ正義の念に溢れてをる。兼山が土佐の藩政を研究の結果から善なりと信ずる處を藩公に建議する態度は廣井博士が港灣其他の國益開發事業に對しては學者に似合はない程、熱心に當局者に建白してをられるのこ好一對である。

○

兼山の學問は空論ではない實利實學を以て固めたものであつたから、其の學んだ處は必ず之を實行すると云ふ風であつた。廣井博士も一事を實行する前には必ず周到なる研究をされた、研究された事は必ず實行すると云ふ風であつた。廣井博士のセメントや火山灰に關する研究、混凝土に關する長期の研究等は有名なものである。(岡崎生)